大阪・少彦名神社の張り子の虎

大阪市役所からの帰り、御堂筋を南下して「道修町(どしょうまち)3 丁目」から東へ歩く。大手製薬会社の大きなビルや薬関係の店が続いていた。通りを行くと「少彦名(すくなひこな)神社」がある。入り口が狭いので、もうすこしで通り過ぎるところだった。

「少彦名」というのは、日本の薬祖神のことで、この神社は「神農祭」で有名らしい。案内によると、昔から大阪の 1 年間の祭りは正月の「ゑびす祭り」で始まり、当社の「神農祭」で終わるため、別名「とめの祭り」ともいわれ、大阪年中行事の一つに数えられている。

厄除け守りとして「張り子の虎」が知られている。その横に「祈コロナウイルス退散」と張り出されていた。境内には「家庭の常備薬」コーナーもあり、正露丸や改源、下呂膏、イボコロリなど、懐かしい薬が展示されていた。

じつは少彦名神社を知ったのは、OSAKA 生涯学習情報誌『いちょう並木』5 月号に掲載された橋爪節也「新おおさか KEY わーど」による。抜粋して紹介したい。

古くから様々な疫病が日本を襲ったが、大阪と感染症のよく知られる物語でいえば、神農祭で有名な道修町（大阪市中央区）の少彦名神社の張り子の虎がある。道修町は江戸時時代からの薬の町で、長崎に輸入された漢方などの薬品価格も道修町で決められた。文政 5（1822）年、大坂でコレラが流行する。そのとき道修町の薬種仲間が「虎頭殺鬼雄黄圓（ことうさつきうおうえん）」という丸薬を作り、虎の御札と一緒に施与した。同社の張り子の虎はこれに由来するとされる。コロナとコレラは語呂も似ているからか、少彦名神社にコロナウイルス退散でお詣りする人もいるという。安政 5(1858)年にもコレラが大坂で流行する。蘭方医で北浜に適塾を開いた緒方洪庵(1810～1863)が、『虎狼痢治準（ころりちじゅん）』と題した治療手引書を出版している。

本の内容は、幕末の長崎で弟子を育成し、西洋式の病院も開設したオランダ人ポンペの口授内容をもとに、他の医学者であるモスト、コンラジ、カンスタットの治療書も引いて、最新のコレラ治療法を示した冊子である。洪庵の経験も踏まえて症状や治療法が詳しく解説され、流行の真っただなかコレラ対策に役立てるため、数日で編集され、治療法に悩む現場の医師に配布された。コレラ流行に直面した医師洪庵の使命感や緊張感が、コロナウイルスに直面した我々にも切実に伝わってくる。

（2020 年 5 月 21 日）